

上代日本における「匹」「疋」の漢字使用について

— 『日本書紀』古写本を中心にして—

金 川 幾久世

1. はじめに

「匹」字を辞書類で調べると、「匹・疋」と併記され、獸・鳥・魚・虫などの動物を数える語と解説されている。つまり、いずれの漢字を用いても同じ「ひき」を意味するということなのである。しかし、現在は、同じ「ひき」を意味していても、昔から同じ字義を示していたとは限らないのではないだろうか。なぜなら、『説文解字』の記述によれば、「匹」と「疋」とは、起源も字義も異なる「別字」だと分かるからである。

「匹」と「疋」は、一般的にも、「匹」が正字、「疋」が俗字とされている。また『廣韻』では入声質韻に「匹：遇也。配也。合也。二也。説文¹⁾云：四丈也、从八匹、八揲一四〔匹〕。俗作疋。譬吉切。」とあり、『集韻』では同じく入声質韻に「匹：僻吉切。説文：四丈也、从八匹、八揲一匹。一曰偶也。俗作疋、非是。」とある。

助数詞の研究のうち、動物の助数詞に関するものは、松本曜（1991）、諸星美智直（1996）、飯田朝子（1999）、藤原多賀子（2004）、王鼎（2006）、陶萍（2013）の6編が確認できる。共通するのは、動物の大きさによる「匹」と「頭」の用法を論じ、「匹と疋」の区別、及び布類を含む用法には触れていない点である。

三保忠夫（1995）も、「〔助数詞〕：匹疋→頭：（対象）馬、驢、駱駝、駄、飾騎：（古訓）ヒトツ」、「たとえば、日本書紀では、馬、飭騎、驢、駱駝、駄を「匹・疋」で数え」と述べ、「匹」字と「疋」字を区別してはいない。

本稿では、「匹」「疋」字の日本における初期の使用実跡とも言える『日本書紀』の古写本中より用例を収集比較検討し、両字の使用状況の実態を明らかにすることを目的としている。つまり、『日本書紀』は、日本におけるこの両漢字の記述資料の出発点であり、比較検討の原点なのである。ここから、現代までの古字（辞）書類・主要作品における用例を通時的に調査し、考察を加え、匹・疋の使用に関する

(2)

今後の方向性を予測できるような根拠の有無についても探っていきたい。

2. 「助数詞 匹・疋」の上代日本における受容

先秦時代には既に用いられ²⁾、魏晉南北朝期³⁾には数量的にも類度的にも急速に増加したとされる、中国の事物を数えるときに用いられる「量詞」の概念は、日本にも漢字とともに伝来し、内外の文物の移動や租税の記録には不可欠な、事物を数えるための「助数詞」として定着した。事物の変化や時代の変遷に伴い、「助数詞」の中には用いられ方が拡張・発展・進化するものも存在すると考えられる。

現在の日本においては、「匹」は動物に、「疋」は布地に対する「助数詞」として使用されるのが一般的になっているが、近代以前は「匹」よりも、「疋」の多用・兼用が目立つ。その使用の変遷過程を探るべく、両字の運用例を、受容の入り口である上代の古典籍資料としての『古事記』『風土記』『日本書紀』⁴⁾を調査した。

収集できた用例は、『日本書紀』に多く、以下の用例2から40として提示した。『古事記』と『風土記』における用例は各1例ずつしか見出せなかったが、用例1・41として参考までに、併せて示している。

特に、用例2から40の「匹」「疋」字が、『日本書紀』の古写本においては、いずれを用いて書写されているかに着目して調査した。ただし、原本が現存しないため、古写本を資料とすることとし、いずれの漢字を用いているかがわかるように、文字の写真及びデジタル画像を貼り付け一覧表にした。本稿では画像の鮮明度を上げる必要性から、各用例中の最古の写本画像のみを一字ずつ提示する形に止めた。写本自体が入手しにくい貴重本であるため、主として、インターネットで公開している画像⁵⁾から収集した。「匹」「疋」字を『日本書紀』の古写本だけでなく、『古事記』『風土記』についても調査したところ、各1例の用例が得られた。

以下の用例等の記述では、a = 熱田本、b = 北野本、c = 田中本、d = 前田本、e = 書陵部系、f = 慶長15年本、g = 岩崎本、h = 国史大系、i = 岩波古典文学大系、j = 小学館新編古典文学全集、k = aβ群と、簡略表記している。

なお、本調査は、各用例中の最も古い古写本における「匹・疋」字の使用に重点をおくため、15世紀以降の写本類である伊勢本・兼右本・内閣文庫本は今回の調査対象から省き、慶長15年本による調査に代えた。

用例1：『古事記 中巻六：百済の朝貢と酒の歌』……8世紀の日本で、馬の助数

詞「疋」が用いられていた例

亦百済国主照古王、以牡馬壹疋、牝馬壹疋付阿知吉師以貢上。

(亦百済こにしせうこおうの国主照古王、牡馬壹疋をまひとつ、牝馬壹疋めまを阿知吉師あちきしに付けて貢上たてまつりき。)

用例 2：『日本書紀 卷六 垂仁天皇元年 11 月；任那と新羅の抗争』…… 8 世紀の
日本で、布帛の助数詞が「匹」の例

故敦賞蘇那曷叱智、仍齋赤絹一百匹賜任那王。(故、敦かれ、賞あつ、蘇そ、那な、曷か、叱し、智ちに賞し、仍り
て赤絹あかきぬ一百匹ひきを齋またせて任那王みまなのこにしに賜たまふ。)

a. 熱田本：巻 6 では最古（永和元年（1375）頃の写本：匹 

用例 3：『日本書紀 卷九 神功皇后摂政四十六年 3 月；斯摩宿禰』…… 8 世紀の
日本で、布帛の助数詞が「匹」の例

仍以五色綵絹各一匹及角弓箭、并鉄延四十枚、幣爾波移。(仍りて五色いづくさの綵絹しみのきぬ各おの
一匹ひとひらと角つのの弓箭ゆみや、せて鉄延四十枚ねりかぬよそひらを以ちて、爾波移にはやに幣あたふ。)

a. 熱田本：巻 9 では最古（永和元年（1375）頃の写本：疋 

用例 4：『日本書紀 卷十 応神天皇十五年 8 月；百済王が阿直岐を派遣』… 8 世
紀の日本で、馬の助数詞が「匹」の例

十五年秋八月壬戌朔丁卯、百済王遣阿直岐、貢良馬二匹。(十五年の秋八月しゆつの戌の
朔つきたちにして丁卯ていぼう、百済王くだらのこにし、阿直岐あちきを遣して、良馬二匹よきうまを貢たてまつる。)

c. 田中本：国宝日本書紀卷 10 残卷（計 1 卷・奈良国立博物館所蔵・平安時代 9 世紀）：
匹 

用例 5：『日本書紀 卷十一 仁徳天皇十七年 9 月』…… 8 世紀の日本で、布帛の
助数詞が「匹」の例

十七年、新羅不朝貢。秋九月、遣的臣祖砥田宿禰・小泊瀬道祖賢遺臣、而問闕貢之事。
於是、新羅人懼之乃貢獻。調絹一千四百六十四匹、及種々雜物、并八十艘。(十七年
に、新羅みつきたてまつ、朝貢みづきたてまつらず。秋九月に、的臣いくほのおみが祖砥田宿禰おやとだのすくね・小泊瀬道祖賢遺臣をばつせのみやつこを遣して、闕貢をさかしのこりのおみらぬ事を問はしめたまふ。是に新羅人みつきたてまつ、懼りて乃ち貢獻かほこまりる。調絹
一千四百六十四匹みつきたてまつと種々雜物つきのきぬ、并せて八十艘なり。)

d. 前田本：平安後期（最古）：匹 

(4)

用例 6：『日本書紀 卷十三 允恭天皇五年 7 月；^{たまたのすくね}玉田宿禰』…… 8 世紀の日本で、馬の助数詞が「匹」の例

宿禰則畏有事、以馬一匹授吾襲為札幣、乃密遮吾襲、而殺于道路。(宿禰、則ち^{ことあ}有事らむことを^{おそ}畏り、^{うま}馬一匹を以ちて^{あそ}吾襲に授け^{さづ}札幣とし、乃ち^{みやのまひ}密に^{すなはち}吾襲を^{さきぎ}遮りて、^{みち}道路に^{ころ}殺す。)

e. 書陵部本：書陵部所蔵資料図書寮文庫画像公開システム：日本書紀（卷 13 北畠親房伝授；平安・鎌倉期写本）：正 **匹**

用例 7：『日本書紀 卷十四 雄略天皇十三年 3 月；^{は たねのみこと}齒田根命の歌』…… 8 世紀の日本で、馬の助数詞が「匹」の例

齒田根命、以馬八匹・大刀八口、祓除罪過、既而歌曰、(^{は たねのみこと}齒田根命、^{うまやつぎ}馬八匹・^{たち}大刀八口を以て、^{つみ}罪過を^{はら}祓除ふ。既にして^{うた}歌して曰く、)

d. 前田本：卷 14 では最古の（平安後期）写本：正 **匹**

用例 8：『日本書紀 卷十四 雄略天皇三年 8 月』……前田本・熱田本 記述なし
大臣、装束已畢、進軍門跪拜曰、「臣雖被戮、莫敢聽命。古人有云匹夫之志難可奪、方屬乎臣。伏願、大王、奉獻臣女韓媛與葛城宅七區、請以贖罪。」(大臣、^{よそほひ}装束すること^{すで}已に^を畢りて、^{いくさのかど}軍門に進み^を跪拜みて曰さく、「^を臣、^{まを}戮せらると雖も、^{やつかれ}敢へて^{つみ}命を^{いんと}奪ふこと^{おほみこと}難しといへるは、^{やつこ}方に^{あた}臣に^な屬れり。伏して願はくは、^{いやしひと}大王、^{こころざし}臣が^{こひわが}女韓媛と^{かづらぎ}葛城の^{いへなところ}宅七區とを^{たてまつ}奉獻りて、^{あかな}罪を^{こひわが}贖はむことを^{すなはち}請はむ。」とまをす)

e. 書陵部本：書陵部所蔵資料図書寮文庫画像公開システム：日本書紀（卷 14 北畠親房伝授；平安・鎌倉期写本）正 **匹**

用例 9：『日本書紀 卷十五 清寧天皇二年 3 月』……熱田本 記述なし

夫匹夫之子、居父母之讎、寢苦枕干不仕、不與共國、遇諸市朝、不反兵而便鬪。(夫れ、^そ匹夫の子だにも、父母の^{あた}讎に^{とま}居ては、^い苦に^{たて}寝ね干を^と枕にして仕へず、^{とも}國を^{とも}與共にせず、^{もろもろ}諸の^{してう}市朝に^{つはもの}遇へば、^{かへ}兵を^{すなはち}反さずして^{たか}便ち鬪ふ。)

e. 書陵部本：書陵部所蔵資料図書寮文庫画像公開システム：日本書紀（卷 15 北畠親房伝授；平安・鎌倉期写本）：匹 **匹**

用例 10：『日本書紀 卷十七 継体天皇六年 4 月；任那四県を百済に割讓』…… 8

世紀の日本で、馬の助数詞が「匹」の例

仍賜筑紫国馬四十匹。(仍りて筑紫国の馬四十匹を賜ふ。)

d. 前田本：巻17では最古の(平安後期の)写本：正 

用例11：『日本書紀 卷十九 欽明天皇七年1月；高麗の大乱』……8世紀の日本で馬の助数詞が「匹」の例

仍賜以良馬七十匹・船一十隻。(仍りて良馬七十匹・船一十隻を賜れり。)

b. 国宝北野本 卷第19(国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製(昭和15))：匹 

用例12：『日本書紀 卷十九 欽明天皇十四年6月；高麗の大乱』……8世紀の日本で、馬の助数詞が「匹」の例

仍賜以良馬二匹・同船二隻・弓五十張・箭五十具。(仍りて良馬二匹・同船二隻・弓五十張・箭五十具を賜ふ。)

b. 国宝北野本 卷第19(国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製(昭和15))：正 

用例13：『日本書紀 卷十九 欽明天皇十五年正月；内臣、船軍を率い百済に渡る』……8世紀の馬の助数詞が「匹」

即令遣助軍数一千・馬一百匹・船四十隻。(即ち助の軍の数一千・馬一百匹・船四十隻を遣らしめむ。)

b. 国宝北野本 卷第19(国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製(昭和15))：正 

用例14：『日本書紀 卷十九 欽明天皇十五年12月；内臣、船軍を率い百済に渡る…8世紀の布帛の助数詞が「匹」の例

但奉好錦二匹・毛氈一領・斧三百口、及び所獲城民、男二女五。(但し好き錦二匹、毛氈一領、斧三百口、及び獲りたる城の民、男二女五を奉る。)

b. 国宝北野本 卷第22(国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製(昭和15))：正 

用例15：『日本書紀 卷二十二 推古天皇七年9月；百済の献上品』……8世紀の

(6)

日本で、駱駝・驢馬の助数詞が「匹」

秋九月癸亥朔、百濟貢駱駝一匹・驢一匹・羊二頭・白雉一隻。(秋九月の癸亥の朔に、
らくだひとつ うさぎうま ひつじふたつ しろきぎすひとつ たてまつ
駱駝一匹・驢一匹・羊二頭・白雉一隻を貢れり。)

g. 岩崎本：卷 22 平安後期 (889～923) の写本：匹 → 匹

用例 16：『日本書紀 卷二十二 推古天皇十六年 8 月』……8 世紀の日本で、馬の
助数詞が「匹」の例

秋八月辛丑朔癸卯、唐客入京。是日、遣飾騎七十五匹而迎唐客於海石榴市衢。(秋
八月の辛丑の朔にして癸卯に、唐客、京に入る。是の日に、飾騎七十五匹を遣して、
唐客を海石榴市の衢に迎ふ。)

g. 岩崎本：卷 22 平安後期 (889～923) の写本：匹 匹

用例 17：『日本書紀 卷二十二 推古天皇二十六年 8 月；高麗の献上品』……8 世
紀の日本で、駱駝の助数詞が「匹」

故貢獻俘虜貞公・普通二人及鼓吹・弩・抛石之類十物、并土物・駱駝一匹。(故、
とりこていこう ふとう ふたり つづみふえおほのみ いしはじたくひとくさ あは くにつもの らくだひとつ たてまつ
俘虜貞公・普通の二人と鼓吹・弩・抛石の類十物、并せて土物・駱駝一匹を貢獻る。)

g. 岩崎本：卷 22 は平安後期 (889～923) の写本：匹 匹

用例 18：『日本書紀 卷二十四 皇極天皇元年 3 月』……8 世紀の日本で、馬の助
数詞が「匹」の例

仍賜良馬一匹・鐵甘鋌。(仍りて良馬一匹・鐵甘鋌を賜ふ。)

g. 岩崎本：卷 24 平安後期 (889～923) の写本：匹 匹

用例 19：『日本書紀 卷二十五 孝德天皇二年 1 月』……8 世紀の日本で、絹と馬
の助数詞が「匹」の例

其四曰、罷舊賦役、而行田之調。凡絹純絲綿、並隨鄉土所出。田一町絹一丈、四町成匹。
長四丈、廣二尺半。純二丈、二町成匹。長廣同絹。布四丈、長廣同絹純。一町成端。
絲綿絢屯、諸處不見。別收戸別之調。一戸贖布一丈二尺。凡調副物鹽贖、亦隨鄉土
所出。凡官馬者、中馬每一百戸輸一匹。若細馬每二百戸輸一匹。(其の四に曰はく、
もと ふやく や みつき おほよ かとり あしきぬ いと わた ならび くじ いた したが
舊の賦役を罷めて、田の調を行へ。凡そ絹・純・絲・綿は、並に郷土の出せるに隨
へ。田一町に絹一丈、四町にして匹を成す。長さ四丈、廣さ二尺半。純二丈、二町
にして匹を成す。長さ・廣さ絹に同じ。布四丈、長さ・廣さ絹・純に同じ。一町に

して端を成す。絲・綿の絢屯は、の處に見えず。別に戸別の調を收れ。一戸に賃ぬの布一丈二尺。凡そ調の副物の鹽と贄、亦郷土の出せるに隨へ。凡そ官馬は、中馬は一百戸毎に一匹を輸せ。若し細馬ならば二百戸毎に一匹を輸せ。

b. 国宝北野本 卷第 25 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製 (昭和 15))：匹 ・疋   

用例 20：『日本書紀 卷二十五 孝德天皇五年 3 月』…… 8 世紀の日本で、布帛の助数詞が「匹」の例

皇太子、慨然頽歎、褒美曰、善矣悲矣。乃授御琴而使唱、賜絹四匹・布廿端・綿二裹。(皇太子、慨然頽歎き、褒美めて曰はく、善き矣、悲しき矣。乃ち御琴を授けて唱はしめたまひ、絹四匹・布廿端・綿二裹を賜ふ。)

b. 国宝北野本 卷第 22 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製 (昭和 15))：匹 

用例 21：『日本書紀 卷二十六 齐明天皇三年 9 月；遣新羅使』…… 8 世紀の日本で、駱駝・驢馬の助数詞が「箇」

自百济還、献駱駝一箇・驢二箇。(百济より還りて、駱駝一箇・驢二箇を献る。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 26 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製 (昭和 15))：箇  

用例 22：『日本書紀 卷二十七 天智天皇六年 11 月；全国の要所に城を築く』…… 8 世紀の布帛の助数詞が「匹」の例

閏十一月丁亥朔丁酉、以錦十四匹・纈十九匹・緋二十四匹・紺布二十四端・桃染布五十八端・斧二十六・鈿六十四・刀子六十二枚賜椽磨等。(閏十一月の丁亥の朔にして丁酉に、錦十四匹・纈十九匹・緋二十四匹・紺布二十四端・桃染布五十八端・斧二十六・鈿六十四・刀子六十二枚を以ちて椽磨等に賜ふ。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 27 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製 (昭和 15))：匹   

用例 23：『日本書紀 卷二十七 天智天皇七年 11 月；高麗の滅亡』…… 8 世紀の日本で、布帛の助数詞が「匹」の例

十一月辛巳朔、賜新羅王絹五十匹・綿五百斤・韋一百枚、付金東巖等。(十一月の

(8)

辛巳しんし つきたちの朔に、新羅王しんらに、絹きぬ五十匹ひき わた・綿きん五百斤をしがほ・草まい たま一百枚こむとうごむらを賜ひ、金東嚴きんとうごむら等に付く。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 27 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製 (昭和 15))：匹 

用例 24：『日本書紀 卷二十七 天智天皇十年 11 月；近江宮おうみのみやの火災』…… 8 世紀
の日本で、布帛の助数詞が「匹」の例

是日、賜新羅王絹五十匹・綿五十匹・綿一千斤・草一百枚。(是の日に、新羅王しんらぎわうに
絹きぬ五十匹ひき あしきぬ・綿五十匹わた きん・綿一千斤をしがほ・草まい たま一百枚を賜ふ。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 27 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製 (昭和 15))：疋  

用例 25：『日本書紀 卷二十八 天武天皇 上 元年 5 月；拳兵の決意』…… 8 世
紀の日本で、布帛の助数詞が「匹」

是日、賜郭務棕等物、総合綿一千六百七十三匹・布二千八百五十二端・綿
六百六十六斤。(是の日に、郭務棕等くわくむそうに賜ふ物ものは、総合て綿一千六百七十三匹・布
二千八百五十二端たん わた・綿六百六十六斤きんなり。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 28 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末期
写本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 26：『日本書紀 卷二十八 天武天皇 上 元年 6 月』…… 8 世紀の日本で、馬
の助数詞が「匹」の例

亦また徵美濃王、乃參赴而從矣。運湯沐之米伊勢國駄五十匹、遇於菟田郡家頭。(亦、
美濃王みののおほきみを徵す。乃ち參赴まゐりて從おほみともにつかへまつる。湯沐ゆ よねの米を運ぶ伊勢國いせのくにの 駄
五十匹、菟田郡うだのこほりのみやけ 家の頭に遇ひぬ。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 28 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉期写
本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 27：『日本書紀 卷二十九 天武天皇 下 五年 8 月；27』…… 8 世紀の日本で、
馬の助数詞が「匹」の例

祓柱馬一匹・布一常、以外郡司、(祓柱は馬一匹・布一常とし、以外は郡司、)
ほらへつもの うま ひき めの じやう これよりほかこほりのみこともち

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 29 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末期
写本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 28：『日本書紀 卷二十九 天武天皇 下 九年 10 月；貧民救済』……8 世紀の本
で布帛の助数詞が「匹」の例

一毎僧尼、各緇四匹・綿四屯・布六端、沙弥及び白衣、各緇二匹・綿二屯・布四端。

ひとり ほふしあまこと おのおもおのもあしきぬ ひき わた とん ぬの たん しや み しろきぬ おのおもあしきぬ
(一の僧尼毎に、各 緇四匹・綿四屯・布六端、沙弥と白衣には、各 緇二匹・綿二屯・布四端なり。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 29 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～
南北朝期写本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 29：『日本書紀 卷二十九 天武天皇 下 10 年正月』……8 世紀の日本で布帛
の助数詞が「匹」の例

辛巳、勅境部連石積、封六十戸、因以給緇卅匹・綿百五十斤・布百五十端・鏝一百

しんし さかひべのむらじいはつみ みことり よさ あしきぬ
(辛巳に、境部連石積に勅して、六十戸を封したまひ、因りて緇卅匹・綿百五十
斤・布百五十端・鏝一百口を給ふ。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 29 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～
南北朝期写本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 30：『日本書紀 卷二十九 天武天皇 下 十四年 5 月；新羅の献上物』……
8 世紀の日本で、馬の助数詞が「匹」

新羅王献物、馬二匹・犬三頭・鸚鵡二隻・鵲二隻及種々物。(新羅王の献物、馬
しらすのこにしきたてまつるもの うま
二匹・犬三頭・鸚鵡二隻・鵲二隻、及種々の物あり。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 29 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末期
写本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 31：『日本書紀 卷二十九 天武天皇 下 十四年 11 月；筑紫大宰』……8 世
紀の日本で、布帛の助数詞が「匹」

是日、筑紫大宰請儲用物、緇一百匹・糸一百斤・布三百端・庸布四百常・鉄一万斤・

箭竹二千連。(是の日に、つくしのおほみこともち まうけ もの あしきぬ ひき いと ぬの
緇一百匹・糸一百斤・布三百端・
ちからしろぬのの じやう やだけ れん まを
庸 布四百常・鉄一万斤・箭竹二千連を請す。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 29 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉期写
本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 32：『日本書紀 卷二十九 天武天皇 下 朱鳥元年正月；改元』……8 世紀

の日本で布帛の助数詞が「匹」の例

賜蓑措御衣三具・錦袴二具、并緇二十匹・糸五十斤・綿百斤・布一百端。伊勢王、亦得實、即賜阜御衣三具・紫袴二具・緇七匹・絲廿斤・綿卅斤・布卅端。(蓑措のはりすり)
おほみそ よせひ にしき はかま あは あしきぬ いと きん たん
 御衣三具・錦の袴二具、并せて緇二十匹・糸五十斤・綿百斤・布一百端を賜ふ。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 29 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 33:『日本書紀 卷二十九 天武天皇 下 あかみとり 朱鳥元年 4 月』…… 8 世紀の日本で、馬の助数詞が「匹」

戊子、新羅進調、從筑紫貢上、細馬一匹・騾一頭・犬二狗・鍍金器、及金銀霞錦綾羅虎豹皮、及藥物之類、并百餘種。(ぼし みつき たてまつ よきうま)
ら どう とう く ちりばめたるくがねのうつはものくがね しろかわかすみにしき あやすはた とらへうかは またくすり たぐひ
 騾一頭・犬二狗・鍍金器と金・銀・霞錦・綾羅・虎豹皮、及藥物の類、并せて百餘種なり。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 29 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 34:『日本書紀 卷三十 持統天皇 四年 10 月; ほかま 博麻の提案』…… 8 世紀の日本で、布帛の助数詞が「匹」の例

故賜務大肆、并緇五匹・綿一十屯・布三十端・稻一千束・水田四町。(かれ むだいし)
あは あしきぬ ひき わた とん たん いね つか こなた ちやう
 并せて緇五匹・綿一十屯・布三十端・稻一千束・水田四町を賜ふ。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 30 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 35:『日本書紀 卷三十 持統天皇 五年正月; つくしのふびとまさる 筑紫史益』…… 8 世紀の日本で、布帛の助数詞が「匹」の例

是故賜食封五十戸・緇十五匹・綿二十五屯・布五十端・稻五千束。(こ のゆゑ)
へひと あしきぬ ひき わた とん ぬの たん いね つか
 食封五十戸・緇十五匹・綿二十五屯・布五十端・稻五千束を賜ふ。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 30 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 36:『日本書紀 卷三十 持統天皇 六年 5 月; つくしのふびとまさる 筑紫史益』…… 8 世紀の日本で、布帛の助数詞が「匹」の例

戊戌、賜沙門觀成純十五匹・綿三十屯・布五十端、美其所造粉。(戊戌に、沙門觀成に、純十五匹・綿三十屯・布五十端、其の造れる鉛粉を美めたまふ。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 30 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 37：『日本書紀 卷三十 持統天皇 七年正月；新宮の整地』…… 8 世紀の日本で、布帛の助数詞が「匹」の例

癸卯、賜京師及畿内有位年八十以上人袞一領・純二匹・綿二屯・布四端。(癸卯に、京師と畿内の、有位年八十より以上の人に、袞一領・純二匹・綿二屯・布四端を賜ふ。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 30 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 38：『日本書紀 卷三十 持統天皇 八年 3 月；醴泉の発見』…… 8 世紀の日本で、布帛の助数詞が「匹」の例

賜其初驗醴泉者葛野羽衝・百濟土羅々女、人純二匹・布十端・鍬十口。(其の初めて醴泉を験せる者葛野羽衝・百濟土羅々女に人ごとに純二匹・布十端・鍬十口を賜ふ。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷 30 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製 (昭 15))：匹 

用例 39：『日本書紀 卷三十 持統天皇 八年 8 月』…… 8 世紀の日本で、布帛の助数詞が「匹」の例

冬十月辛亥朔庚午、以進大肆賜獲白蝙蝠者飛驒國荒城郡弟國部弟日、并賜純四匹・綿四屯・布十端。(冬十月の辛亥の朔にして庚午に、進大肆を以ちて、白蝙蝠を獲たる者飛驒國荒城郡の弟國部弟日に賜ひ、并せて純四匹・綿四屯・布十端を賜ふ。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 30 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～南北朝期写本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 40：『日本書紀 卷三十 持統天皇 十年 4 月』…… 8 世紀の日本で、布帛の助数詞が「匹」の例

戊戌、以追大貳授伊豫國風速郡物部藥與肥後國皮石郡壬生諸石、并賜人純四匹・絲

十^く紵・布^こ廿端・欽^こ廿口・稻^{つか}一千束・水田四町、復^ぼ戸調役、以^じ慰久苦唐地。(戊戌に、
 追^{ついで}大^{だい}貳^にを以^もちて、伊^い豫^よ國^{こく}風^{かぜ}速^{はや}郡^{ぐん}の物^{もの}部^ぶ薬^{やく}と肥^い後^ご國^{こく}皮^{かわ}石^{いし}郡^{ぐん}の王^{わう}生^{せい}諸^{しよ}石^{せき}とに授^{あづか}けたま
 ひ、并^{なら}せて人^{ひと}ごと^{ごと}に^に施^せ四^し匹^{びつ}・絲^{いと}十^{じゆ}紵^{じゆ}・布^こ廿^{じゆ}端^{たん}・欽^こ廿^{じゆ}口^{こう}・稻^{つか}一^{いつ}千^{せん}束^{そく}・水^{みづ}田^{でん}四^よ町^{ちやう}を賜^{たま}ひ、
 戸^への調^{てう}役^{やく}を復^{かへ}し、以^もちて久^{ひさ}しく唐^{たう}地^ちに苦^{くる}しび^しし^しこと^{こと}を慰^{なぐさ}めたまふなり。)

b. 日本書紀 国宝北野本 卷第 30 (国立国会図書館デジタルコレクション：鎌倉末～
 南北朝期写本の複製 (昭 15)) 匹 

用例 41：『常陸国風土記 (香島の郡)』… 8 世紀の日本で、馬の助数詞が「疋」の例

其後、至初国所知美麻貴天皇之世、奉幣、大刀十口、鉾二枚、鉄弓二張、鉄箭二具、
 許^ほす呂^{りよ}四^よ口^{こう}、枚^{まい}鉄^{てつ}一^{いつ}連^{れん}、煉^{れん}鉄^{てつ}一^{いつ}連^{れん}、馬^{うま}一^{いつ}疋^{びつ}、鞍^{あそ}一^{いつ}具^ぐ、八^{はち}咫^ぢ鏡^{きやう}二^に面^{めん}、五^ご色^{しき}繩^{じゆ}一^{いつ}連^{れん}。(そ
 の後、初^{はつ}国^{こく}知^しら^し美^み麻^ま貴^きの天^{てん}皇^{わう}の世^よに^{いた}り^て、奉^{たてまつ}り^て、幣^{へい}は、大^{だい}刀^{たう}十^{じゆ}口^{こう}、
 鉾^{ほこふた}二^に枚^{まい}、鉄^{てつ}弓^{きゆう}二^に張^{ちやう}、鉄^{てつ}箭^{せん}二^に具^ぐ、許^ほ呂^{りよ}四^よ口^{こう}、枚^{まい}鉄^{てつ}一^{いつ}連^{れん}、煉^{れん}鉄^{てつ}一^{いつ}連^{れん}、馬^{うま}一^{いつ}疋^{びつ}、鞍^{あそ}一^{いつ}具^ぐ、
 八^や咫^ぢの鏡^{かがみ}二^に面^{めん}、五^{いつ}色^ふの繩^{ふと}一^{いつ}連^{れん}なりき。)

3. まとめ

上記の用例の内容を集約し、考察を加え、全体的な特徴を簡潔にまとめると、次
 の①～⑤のようなものになる。

①『古事記』及び『風土記』の用例は、各 1 例ずつしか見出せなかったが、馬に
 も「疋」を用いていること。

②『日本書紀』は馬・駱駝・驢馬だけでなく、布類にも「匹」を用いていること。
 ☆布類の「匹」の使用 = 27/46 = 58.7%、馬の「匹」の使用 = 15/46 = 32.6%
 駱駝・驢馬の「匹」の使用 = 2/46 = 4.3%、駱駝・驢馬の「箇」の使用 = 用例
 21 の卷二十六のみ、匹夫・疋夫 = 2/46 = 4.3%

(※助数詞ではないが、匹・疋字の用字として参照した。)

③用例 21 は、駱駝・驢馬の助数詞に「匹」ではなく、「箇」を用いていること。

④写本 a～g の「匹」「疋」の総使用数は「匹」67、「疋」47 の合計 114 であった。
 割合 (使用率) では「匹」が 59.7%、「疋」が 40.3%ということになる。

⑤用例 2～40、計 38 用例中の各写本のうち、最も古い写本における総使用数は
「匹」27、「疋」11、割合 (使用率) では「匹」71.1%、「疋」28.9%であった。

なお、『日本書紀 上』(日本古典文学体系 67 岩波書店 1989 刊)の解説にも

「書写年代が比較的古いだけに誤謬が少なく」とあることから、古い写本ほど「匹」字を使用していた可能性が強い。したがって、『日本書紀』編纂時においても「匹」字を使用していたと考えられる。

また、森 博達は、『古代の音韻と日本書紀の成立』（1991）において、『日本書紀』三十巻を α 群（十四～二十一、二十四～二十七）と β 群（一～十三、二十二～二十三、二十八～二十九）の2群に分けている（巻三十はどちらの群に入るかがはっきりしないので含まれない）。そして、 α 群は中国原音（唐代の北方音）に基づいて漢字の仮名表記が行われており、文章も基本的に古典中国語文で綴られていること、 β 群は、文章に「和習」（古典中国語文にはみられない日本的な要素）が少なからず見られ、日本漢字音＝倭音によって漢字の表記が行われていることを指摘した。つまり、 α 群の巻々は、中国語を母語としている人々（あるいは、それに「近い」人々）が書き、 β 群は、そうではない人々が書いたということ」を指摘している。

この指摘に基づき、上記の『日本書紀』の用例2～40を分類すると、

α 群（漢語母語話者系による編纂）：7・8・9・10・11・12・13・14・18・19・
20・21・22・23・24

β 群（日語母語話者系による編纂）：2・3・4・5・6・15・16・17・25・26・27・
28・29・30・31・32・33

不明群（どちらかはっきりしない）：34・35・36・37・38・39・40

に分けることができるが、用例21の「箇」の使用は α 群に属する漢語的影響による用法の1つとも考えられる。

上述のとおり、『日本書紀』の古写本においては、用例2から40の「匹」「疋」字が、いずれを用いて書写されているかに着目して調査したが、原本が現存しないため、古写本を資料とすることとした。加えて、写本自体が入手しにくい貴重本なので、主として、インターネットで公開している画像を収集し、『日本書紀』本文用例中で「匹」字と「疋」字のいずれを使用しているかを調べた。そして、いずれの漢字を用いているかが一目で比較できるように文字の写真及びデジタル画像を貼り付けて一覧表を作成した。しかし、A5版サイズに縮小すると文字も小さくなり過ぎて読み取れないため、本稿では割愛している。各用例の最も古い古写本に占める割合から、「疋」の使用は時代が下るにつれて、増加していったと推測できる。

乾善彦（2003『漢字による日本語書記の史的研究』）によると、「古写本間の文字の異同を見ると、比較的自由的な文字の書き換えは、通用も含めわれわれの感覚以上に同じと見る範囲の広がったことをうかがわせる。これらの本文の異同は決して誤写なのではなく、どちらに書いても同じと判断された結果と考えるべきではないか（305頁）」とあることから、国内向けに写し残された写本と唐王朝に見られたとしても恥ずかしくない原本とに字体の相違があっても、同じ『日本書紀』と扱われ、珍重され続けたのであろう。

用例2～40の各最古の写本中の「匹」字の使用率が7割を超えることから考えると、現存しない『日本書紀』の原本においても、「匹」字が用いられていた可能性が高いと言える。布類や馬・駱駝・驢馬を数える際、『日本書紀』が正史であるとすれば、本来は、「疋」は用いず、全て「匹」用いてその数量を記述していたのではないだろうか。国内向けに編纂された『古事記』や『風土記』とは異なり、政治文化のお手本としていた隣国中国を意識して、形式だけでなく用字の選択までも模倣することで、対外的国際的に認められるに足る「正史」の編纂を試みたのかも知れない。

当時において、本来の字義とは異なる「疋」は用いず、正しい字義を持つ「匹」を全て用いることで、日本が「正史」を編纂できる能力を備えた、文化水準が高く国際性に富む国家であるという証明が可能となり、地位や存在感も示せたのではないだろうか。加えて、「匹」については、起源の字義を踏まえ忠実に記載しようとする意識が働いているからなのか、偶然なのかは不明だが、馬よりも布類の方に多く用いられている。

最後に、繰り返しになるが、「疋」は「匹」の俗字であると言われ、『大漢和辞典』ほかの辞（字）書類にも記されている。しかし、起源も字音も「pǐ」と「shū」というように、全く異なるのに、なぜ俗字になったのか不可解であったが、最近、入手した『敦煌俗字研究 第二版』という字書の中に、下記の※印の引用にある「“匹”の俗字は“疋”であって、鉤のある“疋”字は近世の辞書の多くが間違っ用いているが、唐代前後の写本の字形と合わず、従うべきではない。」という意味の記述を見つけ、その内容に納得した。つまり、元来、「疋」は「匹」の俗字ではなく、写し間違えた別字のことを俗字として用い、「ひき」と読み習わすようになったとする中国研究者の見解を得たことを補足しておきたい。

p 267: 匹 疋 按《广韵·质韵》:“匹, 俗作疋”。

“疋”即“疋”的楷定形。近世字书多把这一用法的“疋”写作“疋”, 右上部带钩, 既不符字理, 亦与唐代前后写本字形不合, 不可从。

注

- 1) 《説文·匸部》:“匹, 四丈也。”段注:凡言匹敵、匹耦者, 皆於二端成兩取意。
- 2) 「匹」:馬を数える助数詞。馬を匹で数える用例は『書經』文侯之命に既に「馬四匹」と見え、また『文心雕竜』指瑕篇に、昔、馬車は疋(「匹」に同じ)で数え、馬の場合、添え馬を含んで二頭一組で疋を用いていたが、後に単数でも使うようになったとある(『考証』に同じ)。(明治書院『新釈漢文大系 史記十四(列伝七)』平成26年6月刊68頁)
- 3) 劉世儒(1965)は、『魏晉南北朝量詞研究』北京:中華書局刊,185頁)で、对于「匹」来源问题的两派不同的看法一为起源于「匹配」,「匹偶」义,一为起源于「布匹」关系。经过比较认为「匹」之量「马」并无什么特殊理由,而「匹」是可以泛用于一切有「匹偶」可说之物,「匹」量「布」亦起源于匹配之义。(「匹」の由来問題についての二派の異なる考え方は、一つが「一對」「配偶」の意味に由来し、もう一つが「綿布」に關係する由来である。比較を通じて、「匹」には「馬」を量る如何なる特殊な理由もないし、「匹」はあらゆる「連れ合い」となることができる物に広く用いられる、「匹」が「布」を量るのもまた「一對」の意味に由来すると思う。…執筆著者訳)と述べている。
- 4) 『古事記 祝詞』(日本古典文学体系1 岩波書店 1991刊)・『古事記 上代歌謡』(日本古典文学全集1 小学館 1994刊)・『古事記』(新編日本古典文学全集1 小学館 1999刊)、『風土記』(日本古典文学体系2 岩波書店 1989刊)、『風土記』(新編日本古典文学全集5 小学館 1999刊)、『日本書紀 上下』(日本古典文学体系67・68 岩波書店 1989刊)・『日本書紀』(新編日本古典文学全集2・3・4 小学館 1999刊)を資料として抽出した。なお、抽出箇所の確認のため、中村(1968)『日本書紀総索引 漢字語彙篇』及び、ウェブサイト『日本書紀』(http://www.seisaku.bz/shoki_index.html)を参照した。
- 5) 『日本書紀』主要古写本のアクセスサイトは、次の通りである。
 - a. 熱田本(永和本・金蓮寺四世本)(計14巻〔巻1-10・12-15〕・熱田神宮所蔵・重要文化財)【影印本】熱田神宮編『〔高精細カラー版〕熱田本 日本書紀(全3冊)』(八木書店、2017年)〔カラー／荊木美行・遠藤慶太〔書誌解説〕／木田章義・

大槻信〔訓点解説〕／渡辺滋〔料紙解説〕／野村辰美・福井款彦〔熱田社史〕
<https://catalogue.books-yagi.co.jp/books/view/2135> ※巻3のみコロタイプ印刷の複製あり。

- b. 北野本（兼永本）（計28巻〔巻1・3・13・15・30、取り合わせ本〕・北野天満宮所蔵・重要文化財）【影印本】貴重図書複製会編『日本書紀 国宝北野本』（貴重図書複製会、1941年）（モノクロ）【Webサイト】国立国会図書館デジタルコレクション〔モノクロ・【影印本】のデジタル化を公開〕
- c. 田中本（計1巻〔巻10〕・奈良国立博物館所蔵・国宝）【Webサイト】奈良国立博物館収蔵品データベース〔カラー〕<http://www.narahaku.go.jp/collection/1190-0.html>
- d. 前田本（尊経閣本）（計4巻〔巻11・14・17・20〕・前田育徳会尊経閣文庫所蔵・国宝）
- e. 書陵部本（宮内庁本・図書寮本・禁中本・北畠本・興国本）（計12巻〔巻2・10・12・17・21・24〕宮内庁書陵部所蔵）【影印本】『日本書紀 秘籍大観（帖之部）』（大阪毎日新聞社、1926年）【影印本】文化庁監修『国宝・重要文化財大全』七書籍上巻（毎日新聞社、一九九八年）【Webサイト】国立国会図書館デジタルコレクション〔モノクロ・【影印本】をデジタル化し公開〕<http://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/1182092> 【Webサイト2】書陵部所蔵資料目録・画像公開システム〔カラー <https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000077430000>】
- f. 慶長15（1610）刊30巻本日本書紀6（国立国会図書館デジタルコレクション）日本書紀30巻、〔舍人親王〕〔編〕、出版年月日：慶長15〔1610〕出版年月日（W3CDTF形式）（issued:W3CDTF）フォーマット（IMT形式）、容量・大きさ：15冊；27.8×19.4cm 内容記述：古活字版（巻1, 2は写本）、『国立国会図書館所蔵貴重書解題』第2巻、印記：来禽、高木家藏、装丁：和装、永続的識別子：info.ndljp/pid/2607065、<https://dl.ndl.go.jp/info.ndljp/pid/2607065> NDL請求記号：WA7-120、原資料のNDL書誌ID：000007311997、件名：通史、NDLC：W215、言語（ISO639-2形式）：jpn、利用対象者：一般、古典籍資料区分：和漢書、コレクション情報：古典籍資料（貴重書等）-その他、デジタル化出版者：国立国会図書館、デジタル化日（W3CDTF形式）：2011-03-31、提供者：大規模デジタル化（古典籍）、提供制限：インターネット公開、公開範囲：インターネット公開（保護期間満了）、階層レベル：1、作成者典拠ID：00272296、出版地（国名コード）：JP、解題：神

代から持統天皇までを記した史書。養老4年(720)成立。神代巻のみは慶長4年(1599)の勅版があるが、全巻刊行は慶長15年の古活字版が最初。掲出本はこの慶長15年版で、巻一、二の神代巻のみ写本を補配。第2冊巻末に慶長勅版の刊語を写し、端に小字で「延宝四〔1676〕仲秋下旬」とある。補写の年次であろう。第1、2冊の字配りは第3冊以下と同じで慶長勅版とは異なり、また慶長勅版の刊語は慶長15年版にもあるので、補写は慶長15年版に基づくと思われる。全巻にわたり、振り仮名、頭注等の書入れ、朱の句読等が施されている。第3冊巻末に永正11年(1514)、天文8年(1539)、9年の書写奥書を移写する。高木利太(1871-1933)旧蔵。他に第3冊首に「来离」の朱印がある。URL：<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2607065>

g. 岩崎本(計2巻〔巻22・24〕・京都国立博物館所蔵・国宝)(八木書店2002年)

参考資料・文献一覧

- 『古事記 祝詞』(日本古典文学大系1) 岩波書店 1991刊
 『古事記 上代歌謡』(日本古典文学全集1) 小学館 1994刊
 『古事記』(新編日本古典文学全集1) 小学館 1999刊
 『古事記』(国史大系 第七卷) 吉川弘文館 1966刊
 『風土記』(日本古典文学大系2) 岩波書店 1989刊
 『風土記』(新編日本古典文学全集5) 小学館 1999刊
 『日本書紀 上下』(日本古典文学大系67・68) 岩波書店 1989刊
 『日本書紀』(新編日本古典文学全集2・3・4) 小学館 1999刊
 『日本書紀 前篇・後篇』(国史大系 第1巻上下) 吉川弘文館 1966刊
 『魏晋南北朝量詞研究』劉世儒著 北京 中華書局、1965. 6刊
 『古代の音韻と日本書紀の成立』森 博達著、大修館 1991刊
 『日本書紀の謎を解く 中公新書1502』森 博達著、中央公論新社 1999刊
 『日本語助数詞の歴史的研究—近世書札礼を中心に—』三保忠夫著、風間書房、2000刊
 『木簡と正倉院文書における助数詞の研究』三保忠夫著、風間書房、2004刊
 『数え方の辞典』飯田朝子著 小学館 2004/04/1刊
 『数え方の日本史-』三保忠夫著、吉川弘文館、2006刊
 『日本語助数詞—研究と資料—』三保忠夫、風間書房、2010刊
 『字体のはなし 一超「漢字論」一』財前 謙著、明治書院、2010/11/30刊

- 『標柱 訂正 康熙字典』講談社 1977 刊
- 『時代別国語大辞典 室町時代編二』三省堂 1989 刊
- 『大漢和辞典』大修館 2000 刊
- 『漢語大詞典』漢語大詞典出版社 2001 刊
- 『日本国語大辞典』（第二版）小学館 2002 刊
- 『新漢語林』大修館 2010 刊
- 『日本難字異体字大字典〈文字編〉』日本難字異体字大字典編集委員会編、遊子館
2012 刊
- 『新字源』（改定新版）角川書店 2017 刊
- 「日本語歴史コーパス中納言」
- 国立国会図書館デジタルコレクション『干禄字書』1 卷、顔元孫編、学問所御蔵版、
文化 14 刊
- 三保忠夫（1995）「日本書紀における助数詞について」『鎌倉時代語研究 18 卷』79
p～109p 鎌倉時代語研究会編 武蔵野書院
- 松本曜（1991）「日本語類別詞の意味構造と体系 — 原型意味論による分析—」『言
語研究』99,pp.82-106
- 諸星美智直（1996）「『疋（匹）』と『頭』』『日本語研究諸領域の視点 下巻』
明治書院
- 飯田朝子（1999）『日本語主要助数詞の意味と用法』東京大学大学院人文社会系研
究科
- 藤原多賀子（2004）「頭／匹／羽の用法とカテゴリー化の過程」『外から見る日本語
類別詞の対照』くろしお出版.
- 王鼎（2006）「動物を数える助数詞『匹（疋）』について」『文化継承学論集』
明治大学大学院文学研究科
- 陶萍（2013）「助数詞『匹』と『頭』の用法考察」立命館大学総合研究機構

（かながわ きくよ／本学大学院生）